
冴えない女のクリスマスのロマンス

阿波野治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冴えない女のクリスマスのロマンス

【Nコード】

N7106P

【作者名】

阿波野治

【あらすじ】

クリスマスの夜、彼氏のいない頼子は、カップルで賑わう街へあえてその足を向かわせる。そこで彼女が出会ったのは、惚れ惚れするような優男だった。

頼子が白い溜息を闇夜に溶かした時、彼女の中で築き上げられてきた幻想は跡形もなく消えてしまったのだらう。

やっぱり来るんじゃないかった。先刻から何度も、そんな後悔の言葉を胸の内側にこぼしている。

駅前的大通りは、イルミネーションと、クリスマスソングと、カップルたちの姿で煌びやかに彩られていた。ベージュのコートにクリーム色のマフラーという、どこか地味な、冴えない恰好をした頼子は、一人侘びしくベンチに腰を下ろし、眼前に広がる情景を羨望の眼差しで見つめるでもなく、ただ虚ろに眺めていた。

白雪舞い踊るホワイトクリスマスが愛し合う男女に相応しい天気なら、今宵の淀んだ空模様は頼子にお似合いの天候だった。それは厳格に彼女の心の様態を反映していた。彼女の胸中に巣くうは、汚泥をかき混ぜたような、鬱屈した、行き場の見出しがたい黒い感情である。

恋人と呼べる関係性の人間を持たない者は、冬場になると決まって、クリスマスを共に過ごす相手を見つけるべく、その当日までそれは涙ぐましい努力を続けるものだ。頼子もその例外ではなかった。しかし彼氏彼女がいない人間というのは、何某かの決定的な理由があるからそういう身分に甘んじているのである。ゼロが一になるのはそう簡単ではないのだから、ハンディキャップを負った人間が結果を得るのは至難の業と言っている。凡庸な女たる頼子は順当に、収穫を得ぬまま十二月二十五日を迎えた。

こうなってしまうば、悲しき独り者の人間がとるべき行動は、潔く孤独なクリスマスの夜を享受するのみであるように思える。しかし頼子にはその潔さが欠けていた。報われない求愛活動を重ねてき

た彼女は、さながらその反動によって、求めるものを何が何でも得たいという心を強く持っていた。頼子は、諦めの悪い女だった。

そうしてその夜、諦めの悪い独り身の女は、その足をあえて賑わう街の只中へと進めた。頼子は諦めが悪くとも被虐性愛者ではないから、わざわざその羨むべき光景を目に焼き付けに行つたのではない。行動の裏には図々しい打算があつた。

頼子の立てた作戦は、華やぐ街中に自分と同じ孤独な身の上の異性を見つけ、その人とこの夜を共に過ごすことで寂しさを紛らわせる、というものだった。つまりは、自分と同じ思惑を持った異性との間で、一致した利害関係のもとに行われるデート、これを実現させようと頼子は企んだわけである。互いに異性への需要が高まつている状態である今宵ならば、即席カップルが誕生するハードルも自ずと普段よりも低くなる、そんなしたたかな計算もあつた。

期待と打算を胸に抱え込んで、頼子は駅前大通りで希望条件に該当する男性をしばらくの間探した。しかし肝心要の結果はと言えば、御覧の通り。一人淋しくベンチに腰掛ける頼子が全てを物語っている、というわけだった。

頼子の胸中は孤独感と惨めさで満席だった。一人家で安物のクリスマスケーキを頼張つていれば、寂寥を身にしみて感じるだけで済んだ。しかし下手に光を求めたものだから、余計な負の感情をも背負う羽目になってしまった。この運命の残酷さを思うと、惨めな思ひは天井知らずに高まつていくのだった。

帰ろう、と頼子は思った。寒いし、惨めだし、少々空腹だ。家に帰って何か温かいものでも食べて、さつさと寝よう。そして今日体験した虚しさをすっかり忘れてしまおう。頼子は弱々しくも強く決意し、鉛のように思い腰を持ち上げた。

その時だった。

「お嬢さん、お一人ですか？」

その声は喧騒の中にあっても明晰に響いた。「お一人ですか」という言葉から、自分に対してかけられた声なのだと、頼子は悲しくも瞬時に理解した。しかし不意をつかれて咄嗟には返事を出来ない顔を正面に向けると、ダークグレーのスーツを着用した男が目の前に立っていた。長身痩躯の、優しい顔立ちをした若い男である。この人と同じ時間を過ごせたらさぞ素敵だろう、そう思わせるような雰囲気と容姿を兼ね備えた人物だった。

惚れ惚れするような優男を前にして、頼子はドギマギしながら、一人ですが何か用ですか、と訊ねた。すると男は後方に建つ高級レストランを指差し、恐縮した口振りで願いだした。

「食事を済ませたかったのであの店に入ろうとしたのですが、今日はクリスマスということもあって店内はカップルの客ばかりで、それを見ると入店する勇気が出なくて……。だから、もしよろしければ、一緒にあのレストランに入っていただけませんか？ 幸い席には空きがあるので、その点は心配しなくても構いません。勿論、お代は全て私が出します。今日一夜だけでも、私と恋人同士の気分でお付き合いいただければ……」

恋人同士の気分で、という下りを聞いて、頼子の胸は思春期の少女のように高鳴った。魅力的な男性と今宵の一時を過ごすという時間の使い方は、まさしく彼女が抱いていた願望そのものだったからである。

上手すぎる話のような気もした。しかし何より気持ちが高揚して上っていた。頼子は逡巡の時間を殆ど持つことなく、男の申し出を快く承諾した。

すると男がいきなり頼子の手を握った。彼女の基準からすれば大胆な振る舞いに、彼女の心臓は早鐘を打つ。そんな彼女の心を安堵

に導くように、男は蕩けそうなほど甘い微笑を頼子へと送り、レストランに向かって歩き出した。

男は、聖一、と名乗った。

レストランの内部は必要最小限の光に満たされ、クリスマスの夜に相応しい甘美かつ落ち着いた雰囲気醸されていた。一点の曇りなく磨かれた広いガラス窓から街の夜景が一望できる、特等席と言つて過言ではない一席に腰を据えた二人は、メニューの掲載された冊子を覗き込んで注文するべき料理について談判した。聖一は食べたい料理がないか訊ねたが、頼子はオーダーを彼に一任する旨を伝えた。彼女は夕食のメニューよりも、目の前にいる美男子に関心を奪われていたのである。

オーダーは聖一がした。ウェイターに話しかける彼の言葉付きや手振りは、非常に手慣れたものに見え、洗練された印象を頼子に与えた。

オードブルとスープとサラダのあと、メインの牛フィレ肉のステーキがテーブルに到着した。二人は他愛もない会話を交わしながら、ナイフとフォークをしきりに動かしてその肉料理を口に運んだ。会話は主に聖一が話し手となり、頼子が聞き手となった。聖一のエスプリのきいた話、ナイフを扱う右手のスムーズな動き、目が合うと必ず返してくれる目眩がするほど輝かしい微笑み……。それらの全てが頼子を至福へと誘った。

食事を終え、聖一の懷により会計を済ませた二人は、近くの海に面した公園に足を運んだ。

二人は手すりに両肘をつき、黒く染まる寒々しい冬の海の水面を眺める。両者の間に会話はない。目は海へ向き、瞳に映る海面は凧いっていたが、頼子の心は右隣にいる聖一のみを捉え、心臓は極度の緊張から激しく音を立てていた。ドラマであれば、このあと二人は

口づけを交わす――。彼女はその期待から胸を高鳴らせているのである。

しかし現実はそのほど甘いものではなかったらしい。

聖一はやがて頼子に向き直ると、スーツの内側から一枚のメモ用紙を取り出し、それにペンを走らせたのち彼女に手渡した。そこには一件のメールアドレスが記されていた。

「こんなところに長居して風邪でも引いたら大変ですし、このへんでお別れにしましょう。短い間でしたが、とても楽しかったです。

……さようなら」

軽く手を振り、去っていく聖一の背中を見て、頼子の胸は狂おしく締めつけられた。呼び止めよう。そう強く、何度も思った。しかし円満なまま終わりそうなの場に波風を立てたくないという下心と、連絡先を確保しているという事情も相俟って、結局彼女の口から言葉が発せられることはなかった。

自宅に帰ってから、頼子の頭の中は聖一のことについていた。聖一と充実した時間を共にすることが出来た満足感に酔いしれる一方、この関係を一夜限りのものに終わらせてなるものかという思いも胸にあった。

頼子はふと、コートのポケットに仕舞われていた一片の紙片のことを思い出した。それを活かさない手はなかった。今日のお礼のメールをして、そのついでに次回のデートの約束を取りつけよう。有頂天の彼女は、自分が異性と一ヶ月以上交際した経験がない人間であることも忘れて、強気にもそう考えた。

熟考ののち、熱烈なメールは聖一のケータイへと届けられた。しばらくして返信が送られてきた。胸を弾ませながらメールを開くと、

もうあなたとデートすることは出来ません、と言だけ、素っ気なく記されてある。

頼子は信じがたい思いだった。今夜のデートの雰囲気は悪くなかったし、そもそも食事に誘ったのは彼の方からである。自分に一定以上の好感度を持っていると思しき中で、理由を言明するでもなくすげなく断りを入れるとは、一体どうしたことだろう。

到底納得のいかない心境の彼女は、すぐに真意を問い質すメールを聖一へと送った。それに対する返信は早かった。以下のような一文が、返信メールの内容の全てだった。

『サンタクロースは一個人に対して、一年につき一つのクリスマスプレゼントしか贈ってはならないという習わしがあることは、あなただってよくご存知でしょう?』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7106p/>

冴えない女のクリスマスのロマンス

2010年12月31日03時44分発行